

インドー成長する経済

大分県立大分舞鶴高等学校 田所 伸

1. はじめに

MADE in CHINAが日本中を席卷して久しい。ここ数年で我々日本人は中国に対し経済の急成長と世界の工場というイメージを持った。ではインドについてはどうだろうか？ 急成長下の中国の陰に隠れて我々はインドの経済変化を見落としてはいないだろうか。生徒は各国の経済成長をマスメディアから漠然と感じ取ってはいるものの具体的な数的根拠や事例からは学び取っていないのが現状である。そこで今回はキーワードに「BRICs」という言葉はあえて使用せず、「経済の自由化」、「IT産業」、「製造業」を用い、「巨象」と称されるインドの経済成長の足音を高校生に響かせるためのプロセスを考えてみたい。

2. インドの産業に対するイメージ

各国で経済成長が伸長をみせる要因としては重工業等の産業の発達が不可欠である。生徒にインドの産業（工業）についてのイメージをアンケートすると『新詳地理B (初訂版)』（以下教科書）の第I部2章の「資源と産業」で学んだIT関連産業やバンガロールといった回答がかえってくる。確かにバンガロールのIT産業は今やインドの基幹産業の様相を呈している。しかし地誌で扱う産業においては平面的な産業分布よりも時空間的な産業の発展に主眼を置き、論理的、多角的に地域を考察していく所におもしろさや思考から生まれる理解が存在するのではないだろうか。

3. インドにおける産業の歴史と変遷

ここではまず、教科書 p.176～177 の文章チェックを行う。教科書を生徒に一読させ、「インドの工業の歴史の変遷」が読み取れる箇所を生徒自身が考え、マーカーでアンダーラインを引く。その後、

教師が必要箇所を挙げ再度チェックする。

その際はボールペンなどを使用し、マーカーと使い分ければ生徒は自分と教師の視点の差異を客観的に読み取ることができる。

チェック項目

教科書 p.176 「成長するインドの工業」から「インドの工業の歴史の変遷」を読み取る。

- ① イギリス統治時代…p.176の1行
- ② イギリスからの独立後…p.176の2行～6行
- ③ 経済の伸び悩み…p.176の6行～8行
- ④ 経済の自由化…p.176の9行～11行、p.177の1行～3行

上記①～④の時空間のなかでタタ、ヴィルラー、ヒンドラなどの財閥の存在も理解させておく。

その後、「平成20年度センター試験 地理B」の第4問設問4（インドの工業化についての4択正誤問題）を提示し、教科書本文とセンター試験との関連性を指摘し、教科書学習の重要性を認識させる。

4. キーワード1「経済の自由化」

インド経済の強みの一つに財閥の存在がある。ASEAN諸国や中国が外国資本中心で発展してきたのに対し、インドは自国資本の「財閥」が経済発展の中核を担ってきた。とくに鉄鋼業に関してはインド初の自国資本（タタ財閥）によりつくられた製鉄所があるジャムシェドプル、アサンソルの位置をシングブーム鉄山とダモダル炭田とともに『新詳高等地図 (初訂版)』（以下地図帳） p.27、28で確認し、1990年以降の鉄鋼の生産量の急激な伸びを『新詳地理資料 COMPLETE 2008』（以下資料集） p.107③-鉄鋼の生産の図（図1）から読み取らせたい。

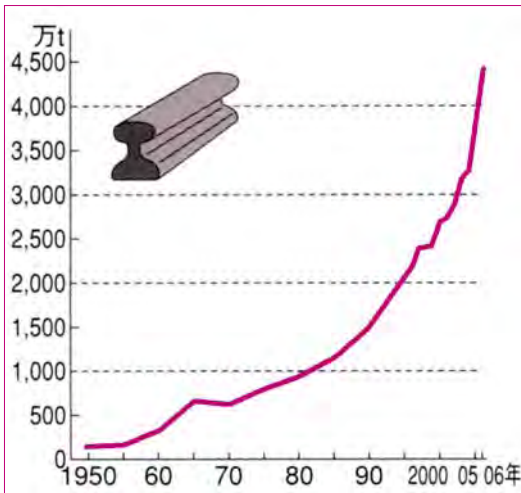


図1 『新詳地理資料 COMPLETE 2008』 p.107③—①

また、経済の自由化により外国資本の直接投資が急増したことを資料集 p.153②進む海外からの直接投資（2006年）の図（図2）で読み取らせ、その事例として同ページの③インドのコールセンターの写真（写真1）から労働力指向型としてのインドの魅力を引き出し、後のIT産業の分野とつなげていきたい。写真1を読み取るなかで、オフィスが洗練されており、旧来の地理の授業で取り扱ってきた発展途上国のイメージが全くないことにも触れておきたい。

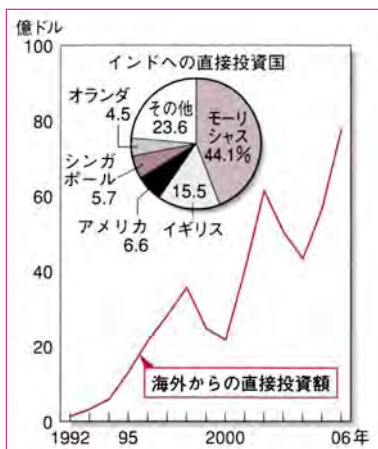


図2 『新詳地理資料 COMPLETE 2008』 p.153②

〈写真1と生徒の基礎知識から読み取る労働力指向型としてのインドの魅力〉

- ・日常的に英語を話す人が多い。
- ・安価な人件費。
- ・欧米との時差。

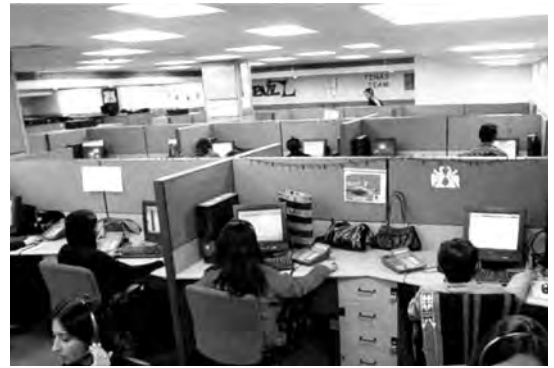


写真1 『新詳地理資料 COMPLETE 2008』 p.153③

経済の自由化という視点から、近年急速に生産台数を伸ばしている自動車産業についても知識を持っておくべきだろう。生徒に印象を与えるために自動車販売においてインドで最大シェアを持つスズキ自動車が販売している軽自動車マルチ800の市場販売価格（当時のレートで56万円）を提示する。その後、タタモーターズが2008年1月に発表した軽自動車ナノ（当時のレートで28万円）を紹介する。これはインドに進出している日系企業の存在を伝えるとともにそのシェアを脅かす財閥系自国企業が存在するというを生徒に意識させるねらいがある。また、低廉な価格での自動車販売が数億人に及ぶ中間層の購買意欲を刺激することで経済の活性化に拍車をかけていることも認識させておきたい。

5. キーワード2 「IT産業」

キーワード1の「経済の自由化」がインドにもたらしたものを生徒に考察させると前述の教科書チェックから導き出した「IT産業」の発展・発達という回答が期待できる。この時点で生徒が抱いているIT都市はバンガロール、ハイデラバード、デリーくらいではないだろうか。その知識範囲を拡大するために教科書 p.176②インドの鉱工業の図で（図3）ソフトウェアテクノロジーパークを確認させる。その際に分布域を①デカン高原地帯、②海岸部、③首都近郊の3つに地域区分することをおすすめる。この作業を踏まえてインド国民は国土のほぼ全域で「IT産業」に従事するチャンス、またITで貧しい人たちが成功するチャン

スがあると伝え、市場原理の競争主義が「IT産業」により近年激化しているという実情を把握させる。



図3 『新詳地理B (初訂版)』 p.176②

そこで「IT産業」の急速な発展を支えた要因について具体的な数値で生徒を刺激する。①英語については資料集p.151-3の「多言語国家インド」を用い商業用語として英語が認識されていることと22の公用語の存在を確認する。②人件費に関してはアメリカ合衆国のIT技術者1人当たりの平均年収850万円を紹介する。その後インドのIT技術者1人当たりの平均年収が65万円であることを伝える。ひと月当たりに換算すると5.4万円という破格な人件費で知的労働者を雇用できるコストメリットがインドに存在している。③欧米との時差は地図帳p.6②を使用しシリコンヴァレーとの時差を計算し確認させる。ここでインドはアメリカ企業のバックアップオフィスの様相を呈していることを知らせる。以上のような具体的な数値は生徒を納得させる重要な要素のひとつに位置づけられるのではないだろうか。補足知識として、インドにおける工科大学の整備など国家を挙げて教育基盤の充実を図っていることにも触れておきたい。

6. キーワード3「製造業」

日本が産業の空洞化を引き起こした要因を生徒に問うてみる。期待される回答として製造業の海外移転が挙げられる。そこでアジアの途上国の経済成長には先進諸国の企業進出が欠かせない要因となっていることを伝え、この状況がインドにもあてはまると解説する。さらにこのあとインドの

特色を日本、中国と比較し生徒に分析させる。そのためには図4の人口ピラミッドを用いることをおすすめする。

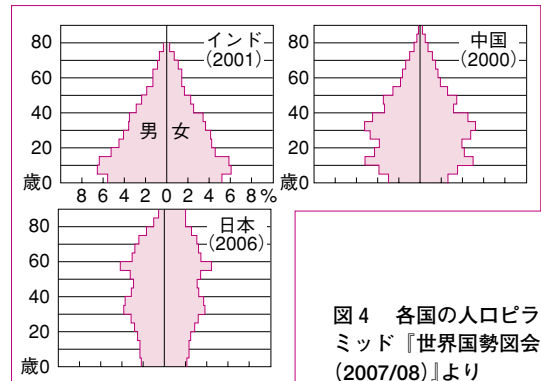


図4 各国の人口ピラミッド『世界国勢図会 (2007/08)』より

図4からインドは人口構成が若く15歳～44歳までが総人口の約50%を占めていることを確認させる（人口政策に関しては事前の授業で触れておく。このときに中国の一人っ子政策を用い、政治・民族形態の違いや普及速度なども紹介する）。その後、毎年世界最大数の労働者がインドで誕生しており、それらを吸収するにはIT産業だけでは不可能であり製造業の育成が国家的に急務であることを伝える。また、製造業にはインフラ基盤が欠かせない。インフラが整備されていないと海外企業（とくに日本企業）が進出を渋る傾向にあることを追補する。この急速なインフラ整備がインドの経済成長を加速させている。

7. おわりに

以上のようにインドの経済は財閥、外資系、IT（とくにソフトウェア分野）、自動車、製造業、インフラ、中間購買層などが有機的に結合し急速に成長している。その「巨象」のあゆみのなかで見え隠れしているリスクにも目を向けておくべきである。人口大国インドは世界最大の貧困層を抱えており、急速な経済成長が急速な二極化をもたらしているという現実である。また、途上国の地誌を考察するにあたって、等質の経済発展事例が自然・人文的地理要素により国家・地域的個性を發揮することも生徒に案内しておきたい。